

●二人で味わう古典和歌(54)

岩田川谷の雲間くもまにむらぎえてとどむる駒の声もほのかに

後鳥羽院

『後鳥羽院御集』「正治初度百首」羈旅五首の一首。建久九年(一一九八)に帝の位を譲り上皇となった後鳥羽院。その活動や信仰のなかで大きな位置を占める事柄に熊野御幸が挙げられる。熊野詣のための険しい道のりを、讓位から承久の乱までの二十四年間で少なくとも二十八回も踏んだという。

掲出歌はその熊野御幸での体験を元に詠まれた作。「岩田川の流れば、谷に湧く雲の間に見え隠れしながら消えてゆく。徒歩で渡るためにとどめてきた馬のいななく声も、消えんばかりにほのかに聞こえていて」。豊かな景を目と耳で鮮やかに切り取って、一首のなかに大きな時間が横たわっている。雲の動きと駒の声が読む者の心に余情となつて沁みてくるようだ。道中での体験や感慨をそのまま詠んでいるところ、在位中にはままならなかつた旅の喜びが真



つすぐに伝わってくる。

岩田川は、今の和歌山県と奈良県の境に源を発する富田川の中流である。『平家物語』によると、一度でも渡ると罪障が消えると言われた川で、たとえ上皇であつても徒歩で渡らなければいけなかつたとも。藤原定家は、川を渡るのに、深い所は水が股に及んで大変だつたことなどを『熊野御幸記』の中に書き記している。これまで岩田川は序詞の一部や信仰の地として引用される程度でさほど歌に詠まれる川ではなかつた。ところが、後鳥羽院がこの歌を「正治初度百首」で披露した三か月後に行われた御幸の和歌会の折、供の歌人たちがこぞつてこの岩田川を詠んだのである。もちろん彼らが直前に岩田川を渡つたことや、会の題が「河」であつたことは踏まえるべきだが、やはり後鳥羽院の作の記憶がそれぞれの背後にあつたと感じないわけはいかない。

多くの地が歌枕であつた時代、肉体の実感を伴う優れた叙景歌がどれほどの感慨を人びとにもたらしたか。体験、体感の表現の力をあらためて思う。

(小島なお)